さよなら。

ねむネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよなら。

【Ｎコード】
Ｎ９５５０Ｏ

【作者名】
ねむネコ

【あらすじ】
高校２年生の沢村昴がいつものように海岸に行くと、一人の少女に出会った。彼女の正体はいったい…
少し切ないストーリーになっていきます。。

出会い

俺は沢村昴、教室の一番窓側の席で真夏の太陽がメチャクチャあたってくる…

カーテンすらないこの田舎の高校…

俺一人でも引っ越そうと思ったけど、その思いをいつもかき消すのはきっとこの海があるからだろう…

俺は近所の海に毎回下校途中に寄る。

綺麗な青色で、透き通っている。

いつも誰も居ない海岸に一人の少女が立っていた。

真っ白なワンピースを着て、真っ白な帽子をかぶった少女だった。

まるで、彼女の周りだけが白く光っているようにも見えた。

それにしても珍しい…。こんな田舎の海に人が来るなんて、しかも平日に…

俺は声をかけることにした。

俺「あの…。何してるの？」

彼女は一瞬驚いたようだったが、しばらくして

彼女「海、きれいだったから」
と言ってほほ笑んだ。
俺「俺、沢村昴。…君は？」
彼女「岡田優衣…」
優衣はまたにこっと笑った。
俺「…今日平日だけど……学校は？何年生？」
優衣「高校2年生、学校は…休みかな」
まさかの俺と同い年…。俺は中学生くらいだと思ってた
俺「学校休みって、どこ高校？」
優衣「……。」
優衣は黙ってしまった。
俺も無理に聞き出そうとは思わなかった。
俺「俺の家、あの坂上ってすぐだから、近かったらよっていいよ」
…その場を紛らわすための生一杯の言葉。
優衣「わかった。じゃあね」

優衣はそれだけいうと沖の方の砂浜へ歩いて行った。

俺は家に帰った。

俺「ただいまぁ～」

妹「おかーりー！！」

幼稚園に行き始めた俺の妹の茜が走ってきた。

俺「今日、幼稚園でなにしてきた？」

茜「ん～とねぇ～。…海でお散歩！！そこで、綺麗なお姉ちゃんがいたんだよ！！」

俺はふと、優衣が浮かんだ。

俺「そのお姉ちゃん白い格好だった？」

茜「うん！でもね、先生がね、真っ白なお洋服だから汚しちゃダメだから、だめよぉって！」

やっぱり、優衣の事だった。

…優衣、いつからあの海岸に居るんだろう…？

思い出の夕日

それから俺は毎日、優衣に会うようになった。

登校の時には会えないけど、下校になると毎日いたから。

俺は走って海まで行く。

そして、いつの間にか俺らは恋人同士のようになっていった。

〜日曜日〜

俺は家から海まで走って行った。

俺「優衣！俺今日休みだから何処でも連れてってやれんぞ！！」

優衣「んー…景色が綺麗に見える所がいいな」

俺「遠慮すんなよ？遊園地くら連れてけるけど？」

優衣「ううん。いいの、私空とか雲とか海とか、自然のもの見てるほうが好きだから」

俺「本当な？…よし、良い場所教えてやる！自転車の後ろ乗れよ。」

優衣「走ってでもいけるよ？私」

俺「良いから、乗って。早く！」

優衣「う…うん。ありがとう」

俺「よし、じゃあ行くぞぉぉ！！」

ギッ

俺はペダルをこぎ始めた。

初めて女の子を自転車に乗せた。

悪い気はしないな…。

ギッ、ギッ、ギッ

ボロ自転車のペダルがなる。

そして、難関の大きな坂まで来た。

優衣「あ。私降りるよ！後ろ押そうか？」

俺「いい、てか、優衣乗ってろ！」

優衣「私重いから！大変だから！」

俺「俺の小さいころからの夢なんだよ！…好きなやつチャリに乗せて、この坂上るの…」

優衣「え…。」

俺「わ、わかったら乗ってろ！」

はっきり自分でも恥ずかしかった。

俺「うおりゃあああああ！！！」

恥ずかしさを隠すように俺は叫んでペダルを再びこいだ。

グラグラしながら上る自転車。

優衣「頑張れ！もう少し！！」

俺「おうよ！！」

猛暑の中、坂を必死に上った。

汗が滝のように流れてきた。

俺「おっしゃ・・・ゴ――――ル！！」

優衣がトンッと自転車から降りた。

俺は自転車とともに道路に倒れた。

優衣「す、昴くん！？」

俺「はぁ、はぁ・・・大丈夫、はぁ、休憩していい？はぁ、はぁ…」

優衣「い、いいよ！十分休んで」

俺はしばらく道路に仰向けになっていた。

呼吸が正常に戻ると俺は立ち上がって自転車にまたがった。
優衣はそれを確認すると後ろに乗った。
俺「もう少しだ」
緩やかな坂を下った。
風がとても気持ちよかった。
俺はしばらく自転車を飛ばした。
俺「着くよ」
優衣「うん」
自転車を山道の前に止めた。
山道は俺ら二人が並べるくらいのスペースで、俺は少し先にいって
何度か優衣に手を差し伸べた。
山道を登りきった時、もう夕方になっていた。
でも、その時間が一番綺麗なんだ。
俺「優衣、見てみろ」
優衣「わぁ…綺麗。オレンジ色の海なんて初めて見た。」

俺「優衣の好きな空も、雲も、海も全部がオレンジ色だぞ」

優衣「綺麗…、ありがとう。」

俺は恥ずかしくなって何も言えなかった。

夕日は静かに海に沈んでいった。

俺「そろそろ行く？」

優衣「うん…」

俺らは山道を降りると自転車に乗った。

暗い道路はなぜか少し寂しかった。

あの、頑張った坂をいっきに下った。

俺「優衣…家は？送るよ」

優衣「海で良いよ。帰り大変だから」

俺「良いよ、送るから」

優衣「いいよ…。私大丈夫だから、ね？…家族の人心配するから」

優衣にも何か事情がある…きっと…

俺「分かった…でも、今度はちゃんと送るから」

優衣「うん」

俺はさっきよりも早くペダルをこいだ。

カラカラカラカラ

車輪が回る。

無言が続いた。

海の前の道路まで行くと、俺の家から小さい影が出てきた。

茜だ。

茜「おにーちゃん、おかーり！！」

優衣は自転車から降りた。

茜「あ、この前のお姉さん！こんばんわ！」

優衣「あら、この前の可愛いお嬢さん。こんばんは、昴くんの妹さんだったのね」

俺「あ。そっか、散歩の時あってたんだよな。妹の茜」

優衣「じゃあ、私行くね？ばいばい茜ちゃん」

茜「おねーちゃんもね、ばいばい！！」

俺「気をつけて帰れよぉ」

優衣はこっちを向いて手を振って、また前を向いて歩いて行った。

俺「じゃあ。茜行こうか」

茜「うん！」

同姓同名…？

俺「ただいま～」

茜「ただいま！！」

母「うわっ！？本当に帰ってきた」

台所から母が顔を見せて言った。

俺「ひでぇなぁ、帰ってこない方がいいのかよ？」

母「ごめんごめん、そうじゃなくて茜がお兄ちゃんが帰ってきたって言って飛び出していったから。

この子本当はレテパシーとかあったりして！」

俺「それはないだろ。あと、テレパシーね。」

母「あら、最近の言葉わかんないわ」

と言って母はまた料理をはじめた。

晩ご飯も食べ終わって、俺は部屋に行った。

そういえば優衣、大丈夫かな…。

網戸にしていた窓から風が入り、薄いカーテンをフワッとたなびかせた。

星が綺麗で俺はずっと眺めていた。

そして、いつの間にか眠りについた。

次の日

俺はいつも通り下校途中に海に寄った。

優衣の姿が見えない…。まさか昨日！

……考えすぎか、優衣にも何か用事があるんだろう。

帰ろうとしたその時だった。

？「最近よくここに長居するねぇ」

振り返ると、幼い頃から優しくしてくれる近所のおばちゃんだった。

俺「え？あぁ、ちょっと友達と話とかしてるんで」

おばちゃん「友達ぃ？…一人のように見えてたけどねぇ…」

俺「いや、ちゃんと居ましたよ。」

おばちゃん「どんな子だい？」

俺「真っ白のワンピースを着て、真っ白の帽子かぶって…。俺と同い年の子です」

おばちゃん「女の子かい？」

俺「…ま、まぁ。そうですね」

おばちゃんは少し黙っていた。

俺「どうかしました？」

おばちゃん「…まさか、その子の名前…岡田優衣ちゃんじゃないだろうねぇ？」

俺「！？…そうですけど…」

おばちゃん「覚えてないのかい？」

俺「…？」

おばちゃんは小さいため息をつくと切ない目をして海の方を見た。

おばちゃん「昴くんはもう覚えてないんだねぇ。昔ねぇ、昴くんと仲の良い女の子がいた

のよ。その子はいつも白いワンピースに、白い帽子をかぶってた。

…そう、あの日は、久々に

家族とのお出かけだったのよねぇ…。その子は今まで以上にはしゃいでいた。波の中

に入って遊んでいたの…お気に入りのワンピースに帽子をかぶって。

でもねぇ、その

時ちょうど、高波が来てしまったの。その子は気づかなかった…。
そのまま波の中に
消えていったわ…。村の皆で夜まで探した。でも、とうとうその子
は見つからなかっ
た。その子の親も、もういいと言ってね…。……その子の名前が岡
田優衣ちゃんなの
よ…。」
まさか…そんなはずない！
だって、だって…俺も、茜も、茜の先生も皆見えてたじゃないか！
同姓同名だ…優衣じゃない、優衣じゃない！
俺は心のなかで何度も叫んだ。
おばちゃんは何度もごめんね、と言って帰って行った。
俺はしばらく立ちすくみ海を見た…。
嘘だよな。優衣じゃないよな。
そう自分に言い聞かせて家に向かった。

さよなら。

その夜俺は眠ることができなかった。

優衣が幽霊…？

…そんなはずはない。絶対に…

そんな言葉が俺の頭の中をぐるぐると繰り返されていた。

気がつくともう夜中の2時をまわっていた。

窓から入る風がカーテンを揺らした。

風にのって何かが俺に伝わってきた。

海に…あの海岸に優衣がいる…

ふと俺はそう思った。

優衣がいる気がして、俺は上着を羽織ると

家を出た。

俺の足は海へ向かっていた。

田舎の夜の空は星が綺麗で、１つ１つがここに居ると言うように

皆精一杯光っていた。

俺は浜辺について足を止めた。

波が静かに音をたてる、

ぼーっとしていると後ろから声が聞こえた。

優衣「めずらしいね。どうしたの？」

いつもと変わらない笑顔を見せる優衣がいた。

俺はしばらく黙った。

優衣「昴くん…？」

俺「…あ…ゆ……優衣はさ…」

信じちゃいけない…でも……

本当なら…

優衣「…」

俺は目からこぼれそうな涙をこらえた。

俺「優衣は、前から俺と知り合いだったんだよな」

優衣「…」

俺「優衣は、俺とすっごい仲良しだったんだよな」

俺「優衣は…もう……ここにはいないんだよな…」

俺「優衣…お前はもういないんだよ……」

優衣「…そうだよ。分かってる…私はもうここにはいない。いちゃいけない…」

優衣「私に残された最後の時間を昴くんと過ごしたかった」

優衣「信じてもらえるか分からないけど、私は神様に願ったの」

優衣「ほんの数日でいい、あの人と一緒の時間をくださいって…」

優衣「昴くん…ありがとう。今日で私…」

俺「ちょ…ちょっと待てよ！……俺はまだ…何もできてない…のに…」

優衣「ううん。夕日を見せてもらったから。」

俺「俺は、ただあの夕日を見せただけで」

優衣「あの夕日ね、私たちがまだ子供だった頃に二人で見たことがあるの」

俺「え…」

優衣「うれしかったなぁ。また二人で見れて」

だんだんと優衣の体が透けていく。

俺「待って！嫌だ！まだ、俺は優衣との思い出全部思い出せてないんだ！」

俺「優衣！思い出させてくれよ！そうじゃなくてもまた思い出つくろうよ！！」

薄くなっていく優衣の体を俺は抱いた。

優衣の肩は小刻みに震えていた。

優衣「…ありがとう…昴くんに会えてよかった…」

俺「…俺もだよ……だから行かないでくれよ…」

俺の目からはもう涙がこぼれていた。

優衣「ありがとう…昴くん…私は昴くんの事がずっと…好きだったよ…」

俺「俺も、優衣のことが…好きだった…」

優衣「ありが・・・とう・・・さよ・・・な・・・ら・・・・・・」

俺の手から優衣の感触無くなった。

よろけた俺は砂浜に倒れこんだ。

そして泣いた。

目の前に居た優衣を思い俺は泣いた。

どれくらい経っただろう…

冷たい風が俺を通って行った。

目が覚めると俺は自分の部屋に居た。

夢…？

俺はあたりを見回した。

そうすると、

机には優衣のしろい帽子があった。

夢じゃない…

優衣は、もういないんだ…

俺は帽子をとった、そこからヒラヒラと紙が落ちてきた。

そこには

『ありがとう』

と書かれていた。

優衣は確かにもういないけど、
俺はもう忘れたりしない。
かけがえのない時間を、優衣の事を
優衣は今も俺のなかで生き続けている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9550o/

さよなら。

2011年10月8日08時52分発行